

戦前の大都市電話積滞統計の解説

藤井信幸『テレコムの経済史』勁草書房, 71 ページ
以下、ならびに 91 ページ以下も必ず参照のこと。

電話交換事業は 1890（明治 23）年に東京、横浜両市でスタートし、以後各都市に普及していくが、この電話交換事業の最大の問題は供給不足による積滞であった。積滞とは、電話交換への加入を申請しても、ただちに加入できず翌年度以降に繰り延べられることを指す。産業の発達に伴い電話需要が増加するにつれて、政府による電話の供給が追いつかず積滞は増加し続けた。加入が何年先に実現するか見当もつかないほどであった。積滞がようやく一掃されたのは 1970 年代末である。

積滞が特に多かったのが大都市で、むしろ地方都市や農村は優遇されていた。この事実は従来、等閑に付されてきたが、ここに掲げる大都市の積滞数を見ると、その実情が明らかになる。公共投資における地方偏重の一端が、この大都市の積滞の多さに示されていると見てよいであろう。